

# 大学英語教育に求められるもの

## 協同教育、グループ間結束の必要性

三島恵理子

### 1. 研究の背景と目的

大学の英語教育現場では、学習者間のコミュニティや良好な関係の構築にはあまり注目されていない。また必修の英語科目においては所属学部の違う学生が混在し、大人数で実施されていることも多く、週一度、90分という短時間の中で学習者間のグループ間結束（Group cohesion）を形成することは容易ではない。しかし、受験用の英語教育から離れ、アウトプットやインタラクションが重視される大学の英語科目では、情報を共有し助け合う、そして不安や喜びを分かち合える友人の存在が、授業参加への意欲、学びへの動機づけにも影響を与えている。Group cohesion は大学生活の質を高め、学業成績の向上にも大きく結び付いているのである（Johnson et al., 2013）。一方、コロナ以降発展してきたオンライン授業、オンデマンド課題や情報提供システムの充実により、現在でも学生間の対面交流を必要としない場面も多い。自然なコミュニティ形成の機会が乏しくなっている状況で、大学語学教員が教室内でできる支援とは何だろうか。高校までには自然に存在した安心できる空間・仲間を大学の教室にも形成できれば、より快適で効果的な英語交流に挑戦することも可能になる。そのために、協同学習を積極的に取り入れた授業を提案したい。本研究は、学習者の Group cohesion を促進するための協同的活動を授業内に多数組み込み、それによってスピーキング自己評価や動機づけがどう変化するかを調査した発表者のアクションリサーチの一部である。本発表では、活動を紹介し、Group cohesion 及びスピーキング活動へどう影響するかを考察した。

### 2. 先行研究

本研究は、Group cohesion、協同教育、英語でコミュニケーションを図る意思（Willingness to Communicate, WTC）の3つの理論的背景に基づき行っている。授業内活動を効果的にするために必要な Group cohesion（cohesiveness とも言われる）とは、メンバー間の親近感や連帯感を指し、この結束が強いグループはお互いを励まし合い、助け合い、柔軟に活動を進めることができる（Dörnyei & Murphey, 2003）。Cohesion が学習者の安心感を高め、活動成果に好影響を与えることは明白で、交流の機会が授業内に限られている大学の授業において、協同教育がその向上を助ける可能性がある。協同教育の考え方における協同学習とは、学習者が自らおよび学習仲間ともに最大限の学びをするためのグループの教育的な使用方法（Johnson et al., 2013）のことであり、協同的活動というのは、単なるグループワークとは異なり、いくつかの条件を満たしている必要がある。Kagan（2013）は、協同学習の基本原則として1.互恵的な相互依存、2.個人の責任、3.平等な参加、4.活動の同時性、の4点を挙げており、特に1、2の項目においては多くの協同学習研究でも注目されている。つまり、活動はメンバーの協力なしでは達成されない内容で、個々の責任が果たされなければグループ全体の成功に繋がらないタスクであるべきである。こういった活動を継続的に実施することで Cohesion が高まり、間違いや恥を恐れる気持ちが減少することで、英語を話す意欲、WTC が向上すると考えられる。そして WTC が高いことは英語使用の機会を増やすことを意味し、日本のような EFL 環境での英語習得において重要な役割を果たすと言える（Yashima et al., 2004）。これら3つの理論は互いに影響を与え合い、日本の大学生の言語学習の質と満足度に深く関わっているのである。

### 3. 実践報告

本研究では、英語を専攻しない学生の選択必修科目である「リーディング」授業2クラスの履修生計64名を対象とし、1学期間の協同学習中心の授業を通して、Group cohesion、スピーキング能力の自己評価、WTC がどう変化したかをアンケート調査により分析した。アンケートは第1週、第15週にオンラインフォームにより実施した。毎授業の目標として、授業時間の60%を協同学習に充てること、その時間の中で必ず複数のクラスメイトと交流させ、相手

を知る活動を取り入れることとし、協同学習タスクについては Kagan (2013) が提案している structure をコンテンツに合わせて調整した活動を中心に行った。ペアやグループでの情報共有や意見交換を主とし、会話の初めには英語での挨拶、名前の確認、相手へのコメントなども習慣として定着させることを徹底した。この発表では毎週の協同学習を通して変動した Group cohesion 及びスピーキング能力の自己評価について取り上げ、その一部について報告した。

#### 4. 結果と考察

Cohesion の変化を示す項目の一部として、本発表では「クラスメイトと親しい」、「クラスメイトの名前を知っている」の 2 点を紹介した。以下の通りどちらも平均の値が上昇している (5-point scale, with 5 being strongly agree)。学期終了時にはクラスメイトとの関係が以前より友好的であることを示しており、参加者の自由記述には、学部を超えた友人関係が生まれたことへの言及、グループメンバーと仲良くなった等の意見も多くあった。特に名前を知ることが良好な関係の構築に欠かせない要素であり (Dörnyei & Murphey, 2003)、そのためのタスクを多く取り入れたことは有効であったと考えられる。

Items	Pre	Post
I am familiar with my classmates in this class.	2.84	3.63
I know the names of my classmates in this class.	2.68	3.46

また、WTC に関わるスピーキングの自信を図るため、英語スピーキング活動 9 項目に対し、どの程度できると感じているかの自己評価を行った。「挨拶を交わす」、「会話を始める」等の項目が含まれ、特に自発的な発言を必要とする「他の人の意見を聞き出す」、「他の人の意見にコメントする」などについては、1 週目には自信のなさを示す学生が多い中、15 週目には大きく向上した (5-point scale, with 5 expressing “I can do it very well.”)。発表では一部を紹介したが、全項目平均は 1.23 ポイントの向上であった。また自由記述には、「意見交換の機会が多く、英語で表現する力がついた」という内容も複数報告された。

Items	Pre	Post
Exchange greetings with others	3.23	4.17
Start a conversation	2.31	3.79
Ask for others' opinions	1.94	3.37
Make comments on others' opinions	2.06	3.50

本授業の中心は読解指導であり、会話能力向上が主の目的ではない。しかし毎回何度も繰り返される英語での交流活動により、挨拶や自己紹介は習慣となり、多くの学生が授業内で英語を話すことへの抵抗感を克服していったと言える。同時に Cohesion が構築され、どの学生が相手でも不安や緊張を感じず積極的に会話に挑戦できるようになっている。このことから、本研究において Group cohesion と WTC に相関的な関連がある可能性が示唆されたが、この結果に基づく結論を得るには、更なるデータ分析や質的調査が不可欠である。また協同学習タスクは継続的な改善が求められ、実質的な効果や問題点についても今後検証を行っていきたい。

#### 引用文献

- Dörnyei, Z., & Murphey, T. (2003). *Group dynamics in the language classroom*. Cambridge University Press.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Smith, K. A. (2013). Cooperative learning: Improving university instruction by basing practice on validated theory. *Journal on Excellence in University Teaching*, 1-26.
- Kagan, S. (2013). *Kagan cooperative learning structures*. Kagan Publishing.
- Yashima, T., Zenuk-Nishide, L., & Shimizu, K. (2004). The influence of attitudes and affect on willingness to communicate and second language communication. *Language Learning*, 54(1), 119-152.